



平成29(2017)年3月25日(土) 15:00開演  
ヨコスカ・ベイサイド・ポケット(小劇場)

## ジャパン・ストリング・カルテット 名曲コンサート vol.8

一口に室内楽といってもその形態は様々だ。ヴァイオリンとピアノという2つの発音原理の異なる楽器が丁々発止にやり合うヴァイオリン・ソナタ、ピアノとヴァイオリンとチェロが絡み合うピアノ・トリオ、音色の異なる様々な管楽器が多彩な色合いを作り出す管楽アンサンブル等々。その中であって弦楽四重奏曲は同質の音色を持つ弦楽器による4つの声部が緊密に織り合わせられながらひとつの求心的な世界を作り上げる点で、きわめて独特な、そして重みのあるジャンルである。4人が意思の疎通を図り合い、奏法や解釈の完全な一致のもとでひとつのハーモニーを作り出すことが求められる曲種であり、そのためには十分な経験を重ねることが必要となる。

ジャパン・ストリング・カルテットはまさに室内楽経験豊かな4人の大御所からなる弦楽四重奏団だ。弦楽四重奏の難しさをわきまえないで向う見ずにチャレンジする最近の若手の団体とは違い、大ベテランならではの深い知見と経験をもとに、このジャンルの奥儀を追い求めてきたカルテットである。4人がひとつの呼吸で緊密な統一体を作り上げていくその演奏は、まさに弦楽四重奏の王道を行くスタイルといえるもので、熟成した深い味わいと質感を持っている。

久保カルテットの名称で創立して以来、このメンバーでの活動はすでに約20年を経ているが、当初からベートーヴェンの弦楽四重奏曲をレパートリーの中心に据えて、ベートーヴェンがこのジャンルに求めた奥深い精神世界を究め続けてきた。これまで横須賀芸術劇場でもベートーヴェンの初期から後期に至る様々な作品を取り上げてきたが、今回演奏されるのは初期の第2番と第6番。ベートーヴェンの初期の弦楽四重奏曲は、いまだハイドンやモーツァルトのスタイルの影響を残しつつも、その中に彼らしい新たな方向を探った意欲作で、いろいろな表現の可能性を秘めた作品だ。そうした一見18世紀の伝統を引く様式の中での、若きベートーヴェンならではの前向きで野心的な精神をジャパン・ストリング・カルテットがどのように浮き彫りにしてくれるのだろうか。プログラム後半はドヴォルザークの名曲中の名曲である「アメリカ」四重奏曲。晩年のドヴォルザークがアメリカ滞在中に母国ボヘミアを思いながら書いた情感豊かなこの傑作の真髓が、ベテランならではの味のある演奏を通して明らかにされるに違いない。弦楽四重奏の世界の奥儀に触れることのできる演奏会となるだろう。

音楽評論家 寺西基之